

## 論 説

# 事前復興まちづくりに向けた被災経験談の活用に関する研究 ——徳島県阿南市橘町での実践事例を通して——

石 井 岡 國 茂  
原 上 村 分 木  
凌 翔 周 ひ 佑  
河 太 哉 かり 馬

## A Study on the Utilization of the Past Disaster Experiences toward Pre-Disaster Improvement Planning for Post-Disaster Recovery ——A Case Study of the Practice in Tachibana, Anan City, Tokushima Prefecture——

### 要 旨

本稿では、被災経験談を活用した事前復興まちづくりの実践事例について報告するとともに、そのための基礎調査として、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談の特徴と、被災経験者を対象とした地域での居住意思について考察した。

一連の取り組みを通して、過去の被災経験談から、被災当時の地域の様子や復旧・復興期での地域の様相を知ることができ、未来の災害での被災生活を具体的にイメージすることに寄与するため、過去の被災経験が事前復興まちづくりを進める手がかりになることが推察できた。

災害が発生する周期とその地で人々が生活する周期を繋ぎ、未来に起こり得る災害について考えるためには、平時から被災経験談を掘り起こし、それを地域知として共有することで、事前復興まちづくりにつながると考えられる。

### Abstract

In this paper, we report the practice example of the utilization of the past disaster experiences toward pre-disaster improvement planning for post-disaster recovery. We also report the characteristics of the disaster experiences of the 1946 Nankai Earthquake, the 1960 Chile earthquake, and intention to live in their local area as a basic investigation.

From the experiences of the past disaster, we can know the situation of the local area at the time of the immediately after the disaster and during the reconstruction period. The experiences of the past disaster will be a clue to promote pre-disaster improvement planning for post-disaster recovery.

In order to connect the cycle at which the disaster occurs and the cycle which people live in the local area, and to think about possible disasters that can occur in the future, it is necessary to discover the experiences of the past disaster, and to share it as a local knowledge in the daily life. These efforts lead to the pre-disaster improvement planning for post-disaster recovery.

### キーワード

被災経験談、事前復興まちづくり、南海トラフ地震、災害教訓誌

### Keywords

Past Disaster Experiences, Pre-Disaster Improvement Planning for Post-Disaster Recovery, Nankai Through Earthquake, Disaster Local-Knowledge Magazine

## 1. はじめに

わが国では災害リスクの脅威にさらされている。本稿を執筆した2018年だけでみても、大阪府北摂地域を中心に被害を受けた「大阪北部地震」、西日本各地で広域的に甚大な被害を受けた「平成30年7月豪雨」、関西地方を中心に風水害や高潮の被害に見舞われた「台風21号」、そして「北海道胆振東部地震」といったように甚大な被害が出た災害が後を絶たないことが見て取れる。自然災害の被災地域では、過去にも被災に見舞われていることがほとんどだ。こうした地域では、自然災害をやりすごすための教訓や知恵が伝承され、教訓や知恵の伝承を通じた地域防災力向上のための取り組みが各地で行われている（石原、2016）（栗田、2007）。しかしながら、防潮堤や社会基盤施設の進展に伴い、安住環境が形成されたものの、コミュニティにおける災害対応力を低下させ、これまで地域で受け継がれてきた災害の教訓を伝承することが希薄化している。

「平成30年7月豪雨」により小田川が破堤したことで甚大な浸水被害が生じた岡山県倉敷市真備地区では、これまでも幾度となく浸水被害に見舞われてきた水害常習地域である（内田、2011）。しかし、河川改修や治水事業が進められ、1999年には第三セクターの井原鉄道が開通したこともあって、浸水想定地域に災害を経験していない人々が移り住んできた。今回の水害では、過去に破堤した同一箇所が破堤し、浸水被害が生じてしまった。災害の発生周期とその地で人々が生活する周期が重ならないことが、被害が拡大した要因の一つであることは明白である。空間的に自然災害を制御するハード整備によって安住環境が形成されたものも、ハード整備だけでは、その限界を超えた災害が発生した際には対処できない。真備地区の事例からも明らかなように、過去の被災経験を地域で伝えあう仕組みを開発することが喫緊の課題である。

ところで、西日本の太平洋側沿岸部を中心に、「南海トラフ地震」が30年以内に70～80%の確率で発生されると想定されている<sup>1)</sup>。中央防災

会議から公表された南海トラフ巨大地震の被害想定<sup>2)</sup>を受けて、地域住民の中には、地域での防災活動の取り組みに対して諦めの態度が生じてしまうことが指摘されている（Shun, Yamori, and Kondo, 2014）。南海トラフ巨大地震の発生により地域での防災活動や地域での居住を諦めてしまうのではなく、地域に住み続けられるようなまちづくりを展開することが肝要である。

そのような中、災害に見舞われる前に地域の「営み」を継続し、被災しても地域の持続可能性を担保するための手法として「事前復興まちづくり」が各地で展開されている（金・佐藤・牧・平田・稲地・岸川・田中、2017）。平時から復興を見据えたまちづくりを進めることで、災害からの被害軽減だけでなく迅速な復旧・復興につながることを期待される。

南海トラフ地震で被害が想定されている地域の多くは、これまでも地震・津波による被害に見舞われていることから、過去の被災経験や教訓が地域で根づいており、自然災害をやりすごすための教訓や知恵が伝承されていると考えられる。自然災害と共生しながら、地域で蓄積された災害にまつわる教訓や知恵を地域資源として捉え直すとともに、こうした知恵や経験を地域内の共有知として、後世に活かすことで、災害と対峙した地域づくりの手がかりになるのではないかと考えられる。

当事者として被災経験はなくても、まちづくりや防災教育の中で地域の被災履歴を知ること、昔の地域の生業や文化などの守るべき地域の「営み」を知る情報源となり得る。被災経験談や、そこから培われてきた教訓を地域全体で共有することで、「事前復興まちづくり」を進める糸口になるのではないだろうか。

このような問題意識の下、筆者は南海トラフ地震での被害が懸念され、これまで幾度となく地震・津波により被害を受けてきた徳島県阿南市橘町をフィールドに、被災経験談を活用した事前復興まちづくりを展開している。

本稿では、被災経験談を活用した事前復興まちづくりの実践事例について報告するとともに、そのための基礎調査として、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談の特徴と、被災経験者

表1 阿南市橘町における昭和南海地震／昭和チリ地震の被害状況<sup>3)</sup>

|           | 昭和南海地震 | 昭和チリ地震 |
|-----------|--------|--------|
| 死者（人）     | 1      | —      |
| 負傷者（人）    | 10     | —      |
| 流失・全壊（戸数） | 39     | —      |
| 床上浸水（戸数）  | 964    | 764    |



図1 阿南市橘町の様子

を対象とした地域での居住意思について分析する。これらを踏まえて、事前復興まちづくりを進める上での被災経験談の活用可能性について考察する。

## 2. 調査の概要

### (1) 対象地域の概要

対象地域である徳島県阿南市橘町（図1）の人口は2,516人、世帯数は1,187世帯（2017年3月31日現在）で、人口減少・少子高齢化が進んでいる地域である。かつては農業・漁業が中心の生業だったが、1970年代に海岸部を埋め立て、工場や発電所が建設されたことから、過去に被害を受けた地震・津波を経験していない住民や工場労働者も比較的多い地域である。

橘町はこれまでに1946年の昭和南海地震や1960年のチリ地震（以下、昭和チリ地震）で被害が確認されている（表1）。2011年の東日本大震災では津波が確認されたものの、橘町内では目立った被害は出ていない。南海トラフ巨大地震の被害想定では、予想される津波の最大高さは8.2 mで、津波の最短到達時間は約19分と報告されており、昭和南海地震・昭和チリ地震を超えた被害が出るのが懸念されている。

津波だけでなく、地震の揺れも最大震度7と想定されている。

### (2) ヒアリング調査の概要

2018年3月20日から24日にかけて、25名の昭和南海地震もしくは昭和チリ地震の被災経験者を対象にヒアリング調査を行った。半構造化インタビューによって、①昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験（避難行動・避難場所、被災生活の様相）、②各地震から得られた教訓、③災害時における地域の課題、④今後も地域に住み続けるか、の4点について主に尋ねた。ヒアリング調査にあたっては、筆者だけでなく筆者が担当しているゼミ生4名（第二筆者以降）と共同で聞き取りを行った。

調査対象者の25名のうち、男性が22名となった。また、昭和南海地震の経験者が24名、昭和チリ地震の経験者が20名であり、両地震の経験者は17名であった。

### (3) 研究の方法と構成

第3章では、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談の内容と、その特徴について考察する。第4章では、両地震の被災経験者を対象に、南海トラフ地震が発生した場合での地域への居



図2 ヒアリング調査の様子

住意思の結果について報告する。第5章では、ヒアリング調査によって得られた被災経験談を基に編纂した災害教訓誌の内容について報告する。第6章では、災害教訓誌を地域内で共有し、過去の被災経験や教訓を参照しながら、事前復興まちづくりについて検討したワークショップの内容と結果について報告する。第7章では、本稿で得られた知見について整理するとともに、事前復興まちづくりを進める上での被災経験談の活用可能性について考察する。

### 3. 昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談とその特徴

本章では、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談について紹介しながら、その特徴について考察していく。

#### (1) 昭和南海地震の被災経験談

まずは、昭和南海地震の被災経験談のうち、特に津波発生直後の様子を表したもののについて見ていく。

「寝ていた二階がグラグラと揺れて、崩れ落ちるかの恐怖。浜では消防団が、かがり火をたいて、「津波が来るぞ!!」と叫ぶ声。「南海（旅館）」の浜沿いを、くるぶしまで潮につかりながら、やっと、御嶽さんに避難しました。」（男性70歳代）

「家の裏には山があるのですぐに避難できました。避難の途中木が流され道がふさがれましたがお兄さんが木をどかしてくれました。」（男

性80歳代）

「「津波が来るからみんな逃げろ」という声を聞き、家族みんなで光明寺に逃げました。津波後はトイレと食事に苦勞しました。」（男性80歳代）

「当時は、今の道のど真ん中に家があり、後ろの山のほうに避難しました。家の1階くらいまで水に浸かりましたが、後ろの山の山頂までは来ませんでした。」（男性80歳代）

「当時小学校三年生ぐらいだった私は、御嶽山まで避難しました。そこから海のほうを眺めると水は弁天島まで引いていました。」（男性80歳代）

以上のような経験談から、津波の避難において家族とともに避難した様子や家族と助け合いながら避難した様子が見て取れる。津波を察知した媒体を尋ねてみると、人の声が最も多く、特に漁師から津波の襲来を聞いた方が多いことがわかる。現代のようにテレビや緊急地震速報などの災害情報システムが発達していない時代において、異変を自ら察知することや、人の声によって津波襲来を察知していた様子が伺える。

#### (2) 昭和チリ地震の被災経験談

同様に、昭和チリ地震の被災経験談のうち、特に津波発生直後の様子を表したもののについて見ていく。

「カブトガニがいないことで異変を感じ、津波が来るのを察知しました。しかし、魚をとり

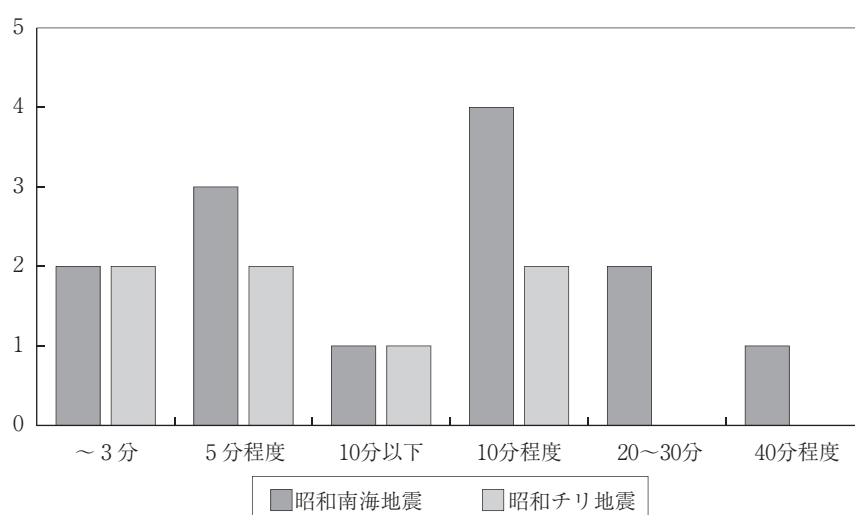


図3 昭和三十九年東日本大震災・昭和三十九年能登半島地震での避難の経過時間

80歳代)

「浜は騒がしかったが、まさか津波が来るとは思わなかったです。セメントのタンクが動くほど津波は強かったため、復旧作業にはかなり苦勞しました。」(女性70歳代)

「当時22歳で警察に勤務していました。叫び声で目が覚め、津波が来るか半信半疑でしたが、足まで水が来て、津波を確信し、住民を避難させました。」(男性70歳代)

「チリ津波では青果市場の果物が流れたり、国道は切断されました。波は1.2メートル位で、港から逃げている途中で波に追いつかれました。」(男性70歳代)

「チリ津波の際は父と家で浜を見ていました。波は床上30 cm くらいでしたが、大木が家に流れてきて今でもその傷は残っています。」(男性70歳代)

昭和三十九年東日本大震災の際には、人の声によって津波が襲来することを知らせる手段として機能したのに対して、昭和三十九年能登半島地震津波の際にはラジオで津波を知った人が一番多かったことが明らかとなった。昭和三十九年東日本大震災・昭和三十九年能登半島地震の被災経験談を比較すると、津波襲来を認知するメディアが異なることから、災害伝達手法の違いが見て取れる。

また、ヒアリング調査により両地震津波の避難時間を尋ねると、昭和三十九年能登半島津波は、昭和三十九年東日本大震災と比べると避難時間が相対的に早かったこ

とが確認できた(図3)。これは体験者本人、あるいは家族の方が昭和三十九年東日本大震災を体験していたことで津波の恐ろしさについて認識していたために、迅速な避難につながったとためだと考えられる。

### (3) 昭和三十九年東日本大震災・昭和三十九年能登半島地震の被災経験談の特徴

昭和三十九年東日本大震災・昭和三十九年能登半島地震の被災経験談を見てきたが、その多くは津波が到達する際の地域の様子、家族との会話、地名が出てきており、被災直後の地域の様子や対応状況を想像しながら読み解くことができる。「津波が来たら高台へ逃げろ」のように、全国どこでも通用する画一的な防災標語が広く流布しているが、地域性を無視した結果、どこか他人事として捉えてしまうことも否めない。地域に住み人々が被災経験談を知ることによって、災害を他人事と思わずに、「自分ごと」として捉えることができ、次なる災害への備えにつながるのではないだろうか。

## 4. 被災経験者を対象とした地域での居住継続意思

事前復興まちづくりを進めるにあたっては、地域で被災した場合でも、そこに住み続けるための方策を考えることが重要である。事前復興まちづくりを展開するための基礎調査として、

昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験者を対象に、阿南市橘町にて南海トラフ地震で想定される被害を受けた場合、地域に住み続けるかどうか尋ねた。本章ではその結果について報告するとともに、地域で住み続けるための視座について考察する。

ヒアリング調査を行った25名のうち、20名が南海トラフ地震によって地震・津波の被害を受けても住み続けたいと回答した。被災経験者の多くは南海トラフ地震で被害を受けたとしても住み続ける意思があることが確認できた。20名のうち、住み続けることを肯定的に捉えて回答したのが17名だった。その理由として、「橘のまちに住み続けたい。南に海があって背に山がある環境は住みやすい」「家が流されたとしても橘の町に戻ってくる。南海地震、チリ地震をこれまで経験しても生まれ育った故郷だから」という回答が得られた。過去の災害によって橘町で難を乗り越えてきたからこそ、故郷としての愛着が形成されたことや、長年住み続けてきたことによって地域の居住環境を肯定的に評価していることが示唆される。

一方で、4名からは、橘町で住み続けると回答したものの消極的な理由で回答した。その理由として、例えば、「橘の町に住みたいか微妙なところ。よその家を買う力もないし、行くところもない、地元に戻るのはいしょうがないと思う」「津波で家が流されてしまっても、行くところがないからまちに住み続けたい」というような回答が寄せられた。単身高齢での暮らしから他に身寄りがいないことや、被災しても他の地域への行き場がない状況が伺える。

町外へ転居する意思を表明したのは4名であった。その理由として、「橘町には残りたいけれど、南海トラフ地震が来たら住み続けられる気力がない」や「やはり南海トラフ地震が来たら津波での被害から住み続けることは難しいだろう」という回答が得られた。なお、4名のうち2名は、橘町への愛着はあるものの、南海トラフ地震の被害の恐ろしさが上回るために、町外へ住むという選択をとる旨が述べられた。

このように、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験者の多くは地域に住み続けたい意思を

示した。ただし、地域で住み続けることに対して前向きに捉えた意見だけでなく、他に身寄りがいないことや、被災しても他の地域への行き場がないことから、地域で住み続けることしか選択肢が確保されていない状況が伺えた。事前復興まちづくりを展開するにあたっては、こうした地域で住み続けることしか選択肢が確保されていない地域住民も考慮して、多様な暮らしのあり方を提示し、選択肢を増やすような取り組みが重要となるだろう。

## 5. 災害教訓誌の作成

昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談を、未経験者や次世代へ広く伝えるために災害教訓誌『明日にそなえて：津波体験談 阿南市橘町』（図4）を作成し、地域住民の方々へ広く公表した。災害教訓誌では、ヒアリング調査から得られた昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談と、今後起こり得る南海トラフ地震に向けた備えの必要性を中心に編纂し、全30ページから構成される。災害教訓誌の目次は図5に示している。

災害教訓誌は単に読み物としてだけでなく、災害教訓誌を活用して、次なる災害への備えを促すために、自宅から避難所までの避難経路を書き込んでもらうことや、災害に対する不安を書き出してもらうなど、読み手が自ら記入する項目を設けた。

さらに、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談を文字に起こし、その中から4編を教訓誌に掲載した。住民の方々による経験談をそのまま載せることによって、被災を経験した当事者の思いを引き出すことを狙いとした。読み手にとっても、住んでいる地域の被災体験を通して、災害をより身近に起こり得るものだと捉えてもらうことや、被災による地域の姿を想像してもらうことを目的としている。

ここでは災害教訓誌に掲載した経験談4編のうち2編を紹介する。『姉と2人で』と題した経験談（図6）では、昭和南海地震での津波が到達する状況が克明に記されている。漁師の人が津波の到達を知らせたことや、お姉さんと二



図4 作成した災害教訓誌（抜粋）

- ・南海トラフ巨大地震を知っていますか？
- ・事前復興はなぜ必要？
- ・被害状況
- ・昭和南海地震やチリ地震が発生したときどこに避難しましたか？
- ・【被災経験談】姉と二人で
- ・昭和南海地震やチリ津波のとき、何をきっかけに津波が来ることに気づきましたか？
- ・防波堤建設に対し賛成ですか？反対ですか？
- ・昭和南海地震やチリ津波が発生したとき避難にどれくらい時間がかかりましたか？
- ・【被災体験談】わしらの役目
- ・地震や津波に関する言い伝えなどがあれば教えてください
- ・まだ大きな津波を体験したことがない世代に皆さんが伝えたいことはありますか？
- ・復旧までの理想時間を教えてください
- ・もし災害によって家を失っても再び橋に戻りたいですか？
- ・災害に備えて今やるべきことはなんでしょうか？
- ・【被災体験談】船を動かす
- ・避難に対する不安などがあれば教えてください
- ・【被災体験談】自主防災の想い
- ・データをまとめてわかったこと
- ・事前復興を考える取り組み
- ・つながりてんでんこ
- ・町の魅力について考える
- ・避難経路を考える
- ・ヒアリング調査にご協力いただいた方の体験記
- ・「明日にそなえて」を作成して

図5 災害教訓誌の目次

人で必死になって津波から逃れたこと、翌朝に家に戻ってくると庭先で魚が泳いでいる様子が見てとれ、津波の到来によって日常とは異なる地域の様子がよくわかる。

『船を動かす』と題した経験談（図7）では、潮の満ち引きがいつもと異なることや、ラジオを通して前日にチリで津波が発生したことを鑑みて、津波が来ることを察知した様子が伺える。

津波から船を守るために、沖に船を出したものの津波が押し寄せて船が流されそうになる危険な状況が見て取れる。

## 6. 事前復興まちづくりのためのワークショップの実施

災害教訓誌を通して過去の被災経験談や教訓

## 『姉と2人で』

漁師の人がな、大きな地震だ言っ、津波が来るぞ〜て、浜の方からゆうてきてくれたけんな、家族の人がもう皆もうほとんど家とって、僕と姉がおったんよ。ほしたら津波が来よーけん逃げーゆって古いおばあさんが言っ、ほんで2人が一緒に逃げたんよ。姉と逃げたのも前のとこまで水がきとったんよ。逃げた時点でこの自分の前な、水がすーときて、このうちの横の溝はもうきとったけんな。そしたら姉がちょうどこの逃げて行く道のところも溝があるんよ。これを通る道がほしたらここやもう水がつかつうけん、道やら何やらわからんのよ。ほしたら姉が道の端手引いていきよったんやけどな、もうビシャビシャビシャビシャと前あたりも。ほんでもう、逃げたまんま上で、山でおったけんな下へおりてこんと。ほいで漁師の人が上で火炊いてくれてん。ほれからもう明るなるまで降りてこなんだんよ。

家族のもんは皆家に残ってね、母親のタンスが倒れて来るっちゅうて、ほいでこう支えとったという。姉と2人で逃げたけんと母親や皆家におってな、逃げんと。古いおじいさんが喘息でな、病気だったけんな、ほんで古いおじいさんのあの娘の、僕らからゆうたらあのおばさんやな。おばさん2人おって。ほんでタンスやほんなもん支えとったちゅうたもんなあ。ほいで僕らは明るなっから津波引いたような朝帰ってきたらもう、ほこら沼だらけでの、ほらーここの庭でも魚がよけなうなぎ鰻とかな、ちっさい魚がようけ泳いどったわあ。

図6 Mさん（男性80歳代）による昭和南海地震の被災体験談

## 『船を動かす』

小勝島に、小さい湾〈てんのうら〉があるんよ。そこへ、釣った魚を兄貴と2人で売りに行ったんよ。夜が明けけるようになったら、潮の満ち引きがいつもと違うんよ。なんかおかしい、どうしたんかいな、潮の流れが早い、いつもの満ち引きより潮が揺れとった。なんかおかしい、他の船の人も話しとったので、橋に帰ってきたら、一人の若い人がラジオを聞いたとたんや、そしたらチリで前の日に地震があったって言うていた、それで私も「津波だ」と言うてたんだ。津波であれば、早く船を港に繋いで縛っておきたいと船を着けた。そしたら兄がお前は一人で（海へ）沖へ「出て行って来い」というので、私一人で海に出て行ったんや<sup>4)</sup>。海が川みたいな水が流れてきて驚いた。

船を出すと同時に潮にやられたんよ、驚いたなあ。潮の流れに合わせたまま、一緒に船を動かす、海から波を背中にうけて船を動かした。このまま流されたままやったら、えらいこっちゃ、鵠の田んぼの方に放り出されると思って、回さないけなと思っていたら、潮が緩くなったんや、それで回ることができて、沖へ走って出る事ができた。これで大丈夫と思って、通常の潮になるまで待つとったんや。

図7 Nさん（男性80歳代）による昭和チリ地震の被災体験談

を参照しながら、事前復興まちづくりについて検討するワークショップを2018年10月20日に開催した。橘町の防災訓練の同日に開催され、32名の地域住民がワークショップに参加した。ワークショップでは、まずは災害教訓誌に掲載されている昭和南海地震・昭和チリ地震の被災体験談や教訓について紹介し、過去に地域で被災した様相について理解を促した。次に、橘町の魅力を考えるとともに、南海トラフ地震が起こり得ると想定した場合に、この魅力をどのように守っていくのかを参加者から意見を出し合っていた。「地域の魅力」は橘町の地図に落とし込むとともに、KJ法<sup>5)</sup>によって構造化していった。

「地域の魅力」を考えることは、一見すると災害への備えを促すこととは程遠いかもしれない。しかしながら、住民が災害後も「住み続け

たい」と思えるまちをつくることこそが、地域を迅速に再建するための近道となる。昭和南海地震・昭和チリ地震で被災しても橘町の多くの人々がその地域に住み続けてきたように、南海トラフ地震が襲ってもその地域に住み続けられるような地域づくりが求められると考える。そのためには、住み続けたいと思える地域とはどのような地域なのかを具体的にイメージし、それを平時から地域内で共有していく必要がある。過去の被災経験談から想起できる被災後の地域の様子や災害とやり過ごした知恵を見出すことで、「過去」―「現在」―「未来」のそれぞれの地域のありようを考えながら、被災後のまちの姿を検討する材料となるだろう。

KJ法により分類した「まちの魅力」は表2にまとめている。橘町のまちの魅力の上位の階層として、「自然」、「地域」、「文化」の3つに



図8 ワークショップの様子

表2 KJ法により出された意見の整理

| 第一階層 | 第二階層     | 第三階層               |
|------|----------|--------------------|
| 自然   | 良い気候     | 暖かい気候／温暖なところ       |
|      |          | 家から1分で素晴らしい海の景色    |
|      | 美しい風景    | 海が近い               |
|      |          | 弁天島と大谷山からの美しい風景    |
|      |          | 浜辺を散歩したくなる         |
|      |          | きれいな島々             |
|      | 豊かな海     | 海が豊かで魚がたくさんとれる     |
| 地域   | 人の良さ     | やさしい人が多い／人が素朴でやさしい |
|      |          | 笑顔あふれる             |
|      |          | 人が温かい              |
|      | 人と人との繋がり | 人のつながりがある          |
|      |          | 知り合いばかり            |
|      |          | 住民の方々を把握しやすい       |
|      | 地域の思い出   | 中浦緑地でどんぐり拾いをした     |
|      |          | 旧橋小学校の桜が美しい        |
|      |          | 昔はよく釣りをしていた        |
| 生活   | 豊かな食     | 海・山・里の食材が豊富        |
|      |          | 食べ物が美味しい           |
|      |          | 美味しい魚（干物、ちりめん、しらす） |
|      | 活発な祭り    | けんかだんじりが有名         |
|      |          | 祭りが活発で面白い          |
|      |          | 舟歌                 |
|      | 娯楽がある    | ゴルフ場がある            |
|      |          | 釣り場が近い             |

大きく分類することができた。さらに、「自然」については、「良い気候」と「美しい風景」と「豊かな海」の3つに区分することができた。「地域」については、「人の良さ」と「人と人との繋がり」、「地域の思い出」の3つに区分する

ことができた。「生活」については、「豊かな食」、「活発な祭り」、「娯楽がある」の3つに区分できた。

以上のように橘町のまちの魅力を構成する要素を抽出することができたが、次なる南海トラ

フ地震で被害が生じた場合、ここであげた魅力をどのように守っていくのか、どれを優先的に守っていく必要があるのかについて丹念に検討していくことで、結果的に事前復興まちづくりにつながるものと考ええる。

今後は、まちの魅力とその守り方について議論するだけでなく、被災経験談やその教訓を確認しながら、南海トラフ地震が発災した場合での避難ルート、避難場所、仮設住宅の候補地、まちを再建する場所について意見交換を行い、南海トラフ地震への備えやまちづくりのビジョンについて計画していく予定である。

## 7. おわりに

本稿では、被災経験談を活用した事前復興まちづくりの実践事例について報告するとともに、そのための基礎調査として、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談の特徴と、被災経験者を対象とした地域での居住意思について考察した。本稿で得られた知見を、以下に整理する。

- 昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談の特徴を見ると、全国どの地域でも当てはまるような画一的な被災経験や防災への啓発を伝えるような内容は少なく、むしろその地域しか当てはまらない固有の経験や教訓が多く語られた。単に防災に役立つ知恵だけでなく、当時の社会的背景や地域特性、日常生活、資材の利活用の様子を描写することができ、被災当時の様子を容易に想像することができると考えられる。
- 事前復興まちづくりを展開するための基礎調査として、阿南市橘町にて南海トラフ地震で想定される被害を受けた場合、地域に住み続けるかどうか尋ねた。その結果、昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験者の多くは住み続けたいと回答した。ただし、地域で住み続けることに対して前向きに捉えた意見だけでなく、他に身寄りがないことや、被災しても他の地域への行き場がないことから、地域で住み続けることしか選択肢が確保されていない状況が伺えた。

- 昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談を、未経験者や次世代へ広く伝えるために災害教訓誌を作成し、地域住民の方々へ広く公表した。災害教訓誌は、ヒアリング調査から得られた昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談と、今後起こり得る南海トラフ地震に向けた備えの必要性を中心に編纂した。災害教訓誌を活用し、被災による地域の姿を想像してもらい、次なる災害への備えを促すために、読み手が自ら記入する項目や、住民の方々の被災経験談をそのまま掲載した。
- 事前復興まちづくりについて検討するワークショップを橘町で開催した。ワークショップでは、災害教訓誌に掲載されている昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験談や教訓について紹介し、過去に地域で被災した様相について理解を促した。これを受けて、橘町の魅力を考えてとともに、南海トラフ地震が起こり得ると想定した場合に、この魅力をどのように守っていくのか議論を行った。南海トラフ地震で被害が生じた場合、ここであげた魅力をどのように守っていくのか、どれを優先的に守っていく必要があるのかについて丹念に検討していくことで、結果的に事前復興まちづくりにつながるものと考ええる。

以上の一連の結果を踏まえて、最後に、事前復興まちづくりを進める上での被災経験談の活用可能性について考察する。被災経験談は未来の災害に対して直接的に活かされるものではない。しかし、被災経験談を通して被災当時の地域の様子や復旧・復興期での地域の姿を知ることによって、次なる災害での被災生活を具体的にイメージできることや、次なる災害に対して自分ごととして捉えることにつながるため、事前復興まちづくりを実践する上での素材や判断材料を提供できるだろう。

防災・復興計画やまちづくりにおいて、地域性を考慮することが重要であると指摘されている（大矢根、2007：220-224）が、被災経験談や教訓を伝承することで、こうした地域性を捉える手がかりになることが考えられる。災害が発生する周期とその地で人々が生活する周期を

繋ぎ、未来に起こり得る災害について考えるためには、平時から過去の被災経験談を掘り起こし、それを地域知として共有するとともに、次なる災害への備えを検討することが欠かせない。地域住民だけでは、被災経験談を学び、次なる災害を考える手がかりがなかなか得られないものである。大学のような外部機関が過去の災害と未来の災害、そして地域の住民同士を繋ぐ「媒介者」として、その役割を果たすものだと考えられる。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費17K01280「災害伝承を活用した災害復興と持続可能性に関する研究」（研究代表者：安田政彦）の成果によるものです。昭和南海地震・昭和チリ地震の被災経験者の方々からは当時の貴重な経験談を伺うことができました。ワークショップでは次なる災害の備えに関して有意義な意見交換の機会となりました。ここに記して感謝を申し上げます。

#### 【注釈】

- 1) 政府地震調査本部「南海トラフで発生する地震」参照 ([https://www.jishin.go.jp/regional\\_seismicity/rs\\_kaiko/k\\_nankai/](https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_kaiko/k_nankai/)) 2019.1.26
- 2) 中央防災会議 (2013)「南海トラフ巨大地震の被害想定 (第二次報告)」参照 ([http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/nankaitrough\\_info.html](http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/nankaitrough_info.html)) 2019.1.26
- 3) 鵜津波を語り継ぐ会 (2003)「地震津波体験の記

録 恐怖の大津波」を参照して作成

- 4) 体験談を聞く限り、当時、漁師は自分の命や家族よりも船を守らなければならなかった。
- 5) KJ 法とは、川喜田二郎が考案し、集められた情報を構造化するための手法である (川喜田、1967)。

#### 【参考・引用文献】

- 石原凌河 (2016)「地域知としての災害伝承の意義」リスクデザイン研究センター、NPO 法人リスクデザイン研究所編『復興と居住地移動』K. G. リブレット No. 39、関西学院大学出版会
- 内田和子 (2011)「岡山県小田川流域における水害予防組合の活動」水利科学 Vol. 55、No 3、pp. 40-55.
- 大矢根淳 (2007)「三陸地震津波」、大矢根淳他編『復興コミュニティ論入門』、pp. 220-224、弘文堂
- 川喜田二郎 (1967)『発想法——創造性開発のために——』中公新書
- 金玖淑、佐藤克志、牧紀男、平田隆行、稲地秀介、岸川英樹、田中秀宜 (2017)「「地域の営み」の継続に着目した事前復興計画策定手法の構築」地域安全学会論文集 Vol. 30、pp. 1-11.
- 栗田暢之 (2007)「いのちをまもる智慧-減災に挑む30の風景」、特定非営利活動法人レスキューストックヤード.
- Sun・Y., Yamori, K., Tanisawa, R. & Kondo, S. (2014) "Consciousness of disaster risk and tsunami evacuation: A questionnaire survey in Okitsu, Kochi Prefecture", Journal of Natural Disaster Science, Vol. 34, No. 2, pp. 127-141.